

## 『歎異抄』第4条 ～浄土の慈悲～

### ■第4条について

#### 5 梶 實圓『大きな字の歎異抄』182頁

この条は、浄土の慈悲について語られた法語です。人間の愛の無力さと悲しさをとおして、その悲しさをいやし、空しさを満たすものは、阿弥陀仏の大悲であり、その慈愛に包まれて念佛するほかにないことを知らされています。

人の世には「愛」がなければなりません。しかし、その愛がひたむきであればあるほど、悲劇的であるところに人間という存在の悲しさがあるのです。そうした人間の悲しい現実を包み、心の傷をいやしていくのが阿弥陀仏の大慈大悲の本願でした。浄土に生まれさせていただくことは、自他を分けへだてる「私」という小さな殻を破られ、万人と一緒に感應しあい、「おもふがごとく衆生を利益する」身になることでした。それゆえ、すえ通らない人間の愛の悲しみと空しさは、念佛という本願の大道に帰入することによってのみ、満たされて救われてゆくことを、「浄土の慈悲」といわれたのです。

~~~~~  
慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。

慈悲について、聖道門と浄土門では違いがあります。聖道門の慈悲とは、すべてのものをあわれみ、いとおしみ、はぐくむことですが、しかし思いのままに救いとげることは、きわめて難しいことです。

### 25 ■聖道門と浄土門～2つの異なるタイプの仏教～

聖道門 … この世界で努力を重ね、自己中心的な執われの心を離れ、清浄なる自己を確立し、悟りに達しようとする仏教（此土入聖）

浄土門 … 阿弥陀仏の本願力によって、その浄土に往生してさとりを開く仏教（彼土得証）

### 道綽禪師『安樂集』

大乗の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖（釈

尊) を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。このゆゑに『大集月藏經』にのたまはく、「わが末法の時のうちに、億々の衆生、行を起し道を修すれども、いまだ一人として得るものあらず」と。当今は末法にして、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。

5 このゆゑに『大經』にのたまはく、「もし衆生ありて、たとひ一生惡を造れども、命終の時に臨みて、十念相続してわが名字を称せんに、もし生ぜずは正覺を取らじ」と。

⇒ 仏教全体を「聖道門」と「浄土門」の二つの教えに分けられる。

10 ⇒ 往生浄土の道を勧められる (2つの理由と1つの証文〈二由一証〉)

①大聖(釈尊)が亡くなり、時は末法に至っている。

②聖道門の教理は奥深く、機の能力は甚だ微弱である。…二由

※『大集月藏經』の文によって聖道門が難証であることが示される…一証

## 15 ■「慈悲」について

「慈」…マイトリー

⇒ 純粹なる友愛・万人の幸せを心から願う心(与樂)

「悲」…カルナ

20 ⇒ 万人の痛みを共感する心(抜苦)

人々の苦惱に同感し、痛みを共感しながら、その苦惱をわが事として受けとめ、苦惱を取り除こうとすることをいう。

## 25 ※三種の慈悲

### 曼鷺大師『往生論註』

慈悲に三縁あり。一には衆生縁、これ小悲なり。二には法縁、これ中悲なり。

三には無縁、これ大悲なり。大悲はすなはち出世の善なり。安樂浄土はこの大悲より生ぜるがゆゑなり。ゆゑにこの大悲をいひて浄土の根となす。

30

小悲…衆生縁(凡夫) 中悲…法縁(聖者) 大悲…無縁(仏陀)

### 親鸞聖人『正像末和讃』

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ

35 如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき

わずかばかりの慈悲さえもたないこの身であり、あらゆるもの救うことなど思えるはずもない。阿弥陀仏の本願の船がなかったなら、苦しみに満ちた迷いの海をどうして渡ることができるであろう。

5 ⇒『正像末和讃』は善鸞義絶事件の2年後に完成

⇒ 身近な人さえ救う力もない身であり、人々を救うなど思うまいという苦悩の告白。

~~~~~  
10 浄土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

一方、浄土門の慈悲とは、念佛して速やかに仏となり、その大いなる慈悲のころで、思いのままにすべてのものを救うことをいうのです。

「聖道の慈悲」…徹底しない慈悲

15 「浄土の慈悲」…徹底した慈悲

### ■仏さまのまなざし

- ・諸々の衆生において視そなはすこと、自己のごとし。（『無量寿經』）
- ・仏心は大慈悲これなり、無縁の慈を以て諸の衆生を摂したまふ。

20 （『觀無量寿經』）

### ■往相と還相

往相 … 念佛する者となって、浄土に往生するすがた

還相 … 浄土で悟ると同時に、様々な形で利他活動するすがた

### 25 ※何のために浄土へ往くのか？

安樂浄土にいたるひと 五濁惡世にかへりては

釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし（浄土和讃）

阿弥陀仏の浄土に往生した人は、様々な濁りと惡に満ちた世に還り来て、釈尊と同じようにどこまでもすべてのものを救うのである

30

⇒ 浄土で仏と成り、釈尊と同じ利他活動（還相のはたらき）を行う。

### 法然聖人「津戸三郎へつかはすお返事」

35 とく（はやく）極樂へまいりて、悟りをひらきて、生死にかへりて、誹謗不信のものをわたして、一切衆生をあまねく利益せむとおもふべきことにて候也。

- ・法然聖人9歳の時に、父・漆間時国が明石定明の夜襲によって亡くなる。

### 父の最期の言葉

5 「敵を恨んではならない。恨みを晴らすのに恨みを持ってするならば、人の世に恨みがなくなるときはない。出家して私の菩提を弔い、悟りの道を求めなさい」

- ・亡き父の遺言どおり、法然聖人は13歳の時に比叡山へ。「智慧第一の法然房」と称されるが、43歳で本願念佛に出遇うまでは出離生死の道をさまよう。

⇒ 最澄の『山家学生式』に、「己れを忘れて他を利するは、慈悲の極みなり」とあるが、大乗佛教が重視する利他行への葛藤か。

※父の命を奪った者への恨みを捨て去ることができるだろうか？

15 「浄土の慈悲」とは、自分自身が念佛を申す身となって浄土に往生してさとりをひらき、仏の大悲心を完全に身にそなえて、人々を救い上げていくこと。

~~~~~  
今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと。

この世に生きている間は、どれほどかわいそうだ、気の毒だと思っても、思いのままに救うことはできないのだから、このような慈悲は完全なものではありません。ですから、ただ念佛することだけが本当に徹底した大いなる慈悲の心なのです。このように聖人はおおせ仰せになりました。

### ■念佛申すことこそが、「すゑとほりたる大慈悲心」となる

⇒ 念佛申す身となり、浄土へ往生して還相のはたらき（大慈大悲のはたらき）に加わることこそが、徹底した慈悲を実践することのできる道である。

### 30 まとめ

第4条は聖道と浄土の慈悲の優劣を論じているものでも、人間の努力を否定するものでもない。そこには人間の慈悲の限界、自分の力の無力さや悲しさに気づかされずにはいられない私の現実が説かれるることを通して、阿弥陀仏の慈悲に包まれていることへのよろこびが表されている。